様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　４　月　２５　日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基礎研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２２５
研究課題名（和文）マーク・トウェインと世紀転換期(1890-1910)―反帝国主義言説の修辞―

研究課題名（英文）Mark Twain at the Turn of the Century,1890-1910:
On His Rhetoric of Anti-Imperialism

研究代表者
井川　眞砂（IGAWA　MASAGO）
東北大学・大学院国際文化研究科・名誉教授
研究者番号：30104730

研究成果の概要（和文）： マーク・トウェイン研究史において相対的に看過されてきた晩年期に焦点をあて、その反帝国主義言説の分析をとおし、修辞の特徴ならびにその思想を考察した。（１）アメリカ西部のほら話で育った彼のユーモアは、＜連想を生み＞また＜よく脱線する＞その語りの中に生き続けるものの、（社会性・政治性が付与されて）変容する。（２）そうした変容の思想的基盤を求めるならば、晩年の社会的・政治的洞察力に見出せるだろう。彼は、多数の一般庶民の認識の成長に期待し、そこに歴史を動かす「ひとすじの希望」を抱くようである。ここにみるトウェイン晩年の表現活動は、既存の晩年像に修正を迫るものだといえよう。

研究成果の概要（英文）: This project focuses on a relatively neglected period in Mark Twain's life and work, and specifically on the period at the turn of the century, 1890-1910. Complex as his last years might be, the picture of his last years I draw here might help readers to see a Mark Twain who is still quite active and not necessarily pessimistic over the future of our race. I discuss his rhetoric of anti-imperialism, mainly in his travelogue *Following the Equator* (1897) and his story "The Chronicle of Young Satan" (1969). Some conclusions that could be drawn include: (1) Although Twain's humorous style of "associative" and "digressive" storytelling, which he learned from his early years in the West, is still alive, it has been transformed socially and politically. (2) That transformation is the result of a new phase of deep thinking, both social and political.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：米文学

１．研究開始当初の背景

（１）マーク・トウェイン研究史に置いてその晩年期の研究は、長い間相対的に看過されてきた。その結果、複雑なトウェイン晩年像はなお十分捉えきれない状況にあった。

（２）ようやく、トウェイン晩年期に研究関心が向けられるようになり、その中でも「世紀転換期のトウェイン」を特集した *Arizona Quarterly* (Spring 2005) 誌中の諸論文は注目に値した。また、2008 年「"The Mysterious

Stranger" 執筆 100 年記念シンポ」（於：エルマイラ大学、Joseph Csicsila et al., eds., *Centenary Reflections on Mark Twain's No.44, The Mysterious Stranger* [Columbia, Missouri: U of Missouri P, 2009]）、および 2009 年「マーク・トウェイン研究国際会議」パネル・ディスカッション（於：エルマイラ大学）等は当該分野における新しい貴重な先行研究であり、進行中の議論だった。上記パネル・ディスカッションには、私自身も参加する機会を得て報告した。

（３）前述の *Arizona Quarterly* 誌ゲスト・エディターShelly Fisher Fishkin こそは、「1999 年京都アメリカ研究夏期セミナー」に文学部門基調講演に招聘したトウェイン学者（合衆国マーク・トウェイン協会会長[当時]、のち合衆国アメリカ学会会長）である。同京都セミナー文学部門の計画立案およびテーマ設定に参画した私は、基調講演「世紀転換期のアメリカとマーク・トウェインの歴史意識」を同教授に依頼した。当該テーマの重要さと面白さを改めて認識したのは、それを企画した我われだけでなく同教授自身でもあった事が、京都セミナー後に出版された上記 *Arizona Quarterly* 誌上特集「世紀転換期のトウェイン」のゲスト・エディターを務めていることからも推察できる。

（４）「晩年のマーク・トウェイン研究」は、じつは、1970 年代以来の私自身の研究テーマであり、これまでその研究を続け、拙論を公刊してきた。

２．研究の目的

（１）マーク・トウェイン研究史において相対的に看過されてきた晩年期に焦点をあて、トウェイン晩年像の構築に積極的に寄与することを目指す。

（２）そのために、トウェイン晩年期の反帝国主義言説を分析し、その修辞の特徴ならびに思想を明らかにする。

３．研究の方法

（１）トウェイン晩年期にあたる世紀転換期（1890 - 1910）の作品をとりあげ、旅行記『赤道に沿って』（1897）や、『不思議な少年三手稿』（1969）他を中心に、その反帝国主義言説の修辞をていねいに分析する。

（２）そうした分析作業をとおし、諷刺の対象を笑い飛ばす話術/修辞の特徴を明らかにする。ひとつは、トウェインが若いころ学んだアメリカ西部のユーモアの系譜のなかで考察し、その変容の様を検討する。いまひとつは、その変容を生むウェインの思想的基盤について考察する。

（３）トウェイン晩年期の研究にきわめて有益な新版『マーク・トウェイン自伝』第１巻（2010）を適宜参考にして本課題を考察する。

（４）以下に主な参考文献を記す。

Primary Sources:

Twain, Mark. *Following the Equator and Anti-Imperialist Essays.* Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford University Press, 1996.

___. *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts.* Ed. William M. Gibson. University of California Press, 1969.

___. *How to Tell a Story and Other Essays*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford University Press, 1996.

___. *The Man That Corrupted Hadleyburg and Other Stories and Essays.* Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford University Press, 1996.

___. "The New Dynasty." *Mark Twain Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1852-1890*. The Library of America. New York: Literary Classics of the United States, Inc. 1992. 883-90.

___. *Autobiography of Mark Twain*.Vol.1. Ed. Harriet E. Smith et al. Berkeley: University of California Press, 2010. Print.

Secondary Sources:

Covici, Pascal, Jr. *Mark Twain's Humor: The Image of a World*. Dallas: Southern Methodist University Press, 1962.

___. Afterword. *How to Tell a Story and Other Essays*. By Mark Twain.

Inge, M. Thomas, ed. *The Frontier Humorists: Critical Views.* Hamden, Conn.: Archon, 1975.

Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire: In the Making of U.S. Culture*. Cambridge: Harvard University Press, 2002.

Lynn, Kenneth A. *Mark Twain and Southern Humor*. Boston: Little Brown, 1959.

Melton, Jeffrey Allan. *Mark Twain, Travel Books, and Tourism: The Tide of a Great Popular Movement*. Tuscaloosa: University of Arabama Press, 2002.

Rowe, John Carlos. "Mark Twain's Critique of Globalization (Old and New) in *Following the Equator, A Journey Around the World* (1897)." *Arizona Quarterly* 61.I (2005): 109-35.

Zwick, Jim. *Mark Twain's Weapons of Satire: Anti-Imperialist Writings on*

the Philippine-American War.
Syracuse University Press, 1992.

４．研究成果

本研究によって、以下の諸点を確認するとともに、トウェインの反帝国主義言説の修辞について、つぎの 2 側面から結論を得た。成果の全体を 4 項目にまとめて記す。

（１）旅行記『赤道に沿って』は、1895 年 7 月から 12 か月におよぶ世界一周講演旅行の記録である。赤道に沿って地球を一周する旅の第一目的が破産したトウェインの多額の借財返済にあったため、この旅は、講演会の参加者をできるだけ大勢獲得し、できるだけ多くの収入をあげるべく企画され、その必要性から、旅先には英語圏諸地域の植民地（English speaking colonies）が選ばれた。すなわち、オーストラリア、ニュージーランド、セイロン、インド、マダガスカル、南アフリカ等である。この結果、皮肉なことに、この旅は大英帝国植民地実態視察の内実をもつことになる。この点を、まずは確認しておくことが重要であろう。

（２）赤道に沿って世界にひろがる植民地をオーストラリア、インド、アフリカへと実地に訪ねることは、もちろんトウェインにとって初めての体験である。植民地原住民に対する偏見や差別意識をある程度なお抱えながらも、トウェインの反帝国主義、反植民地主義の姿勢は、以後の執筆活動を見るにつけ、この旅によって明確な輪郭をもち始めるようである。訪問する先々で白人入植者に会い、話を聴き、また文献や資料ならびに新聞記事を読んで原住民支配の歴史を辿り、トウェインは白人文明への批判的認識をもつようになるのである。アメリカを出国して、アジア・アフリカを訪ねることによって、ついに彼は、かつてのアメリカ南部奴隷制支配と、目の前の植民地支配とが同根であること悟るのだが、そのとき瞬時にして彼の脳裏に現出したのは、50 年前のアメリカの奴隷虐待の場面だった。1 年余に及ぶアジア・アフリカ植民地「視察」の間に、トウェインの認識と想像空間は地球規模のひろがりと、思想的な深まりをもつようになっていくようである。

（３）では、その反帝国主義言説はいかに表現されるだろうか。大きなくくりでそれをひとことでいうなら、こう纏めることができようか。すなわち、①アメリカ西部のほら話で育ったトウェインのユーモアは、それが反帝国主義言説であってさえ、その語りの中に生き続ける。一見したところ＜くつろいだ＞その語りは、＜連想を生む＞また＜よく脱線する＞スタイルである。だがそのユーモアには社会性・政治性が付与され、それは変容するのである。アメリカ西部のトール・テール(ほら話)やホークス（ひとかつぎ）が、地球規模にひろがる想像空間にあって、社会性・政治性を付与されて、トウェインのユーモアの構想は壮大なものになる。

1896 年、旅の移動の船上で、トウェインは、＜真＞と＜偽＞の境界を撹乱する P.T.バーナムによる「ほら話」（シェイクスピアの生家を購入してアメリカに移築する企てにより「一杯食わせる」話）のきわどいアナロジーをすべり込ませて「ひとかつぎ」をした後、旅行記は南アフリカの報告に入る。今度は、大英帝国のケープ植民地首相セシル・ローズの＜真＞を装った＜偽＞の複雑な企み（人かつぎによって軍隊の出動を謀り、トランスヴァール共和国併合を企図）をついに見抜いてトウェインは笑い飛ばす。シェイクスピアの生家買収ならぬ、小さな国のダイヤモンド鉱山の強奪（ほら話ならぬ、この世の一大事件）である。トウェインの語り（物語る＝嘘をつく）の中でバーナムはシェイクスピアの生家購入に成功するが、南アフリカで現実に起こったジェイムソン事件では、その謀略に失敗する。それにしても、世間の人びとを操るその手口（＜真＞と＜偽＞の境界を撹乱して語る「ほら話」）は何と似ていることか。トウェインの笑いの構想はじつに壮大である。西部のユーモアの伝統がグローバルなコンテクストの中に取り込まれ、地球規模に広がる植民地の現状を批判するというダイナミックな変容が読みとれる。アメリカ西部のユーモアを活用しながら、それを変容させるトウェインのストーリーテリング（物語を話す/物語の話術/嘘をつく）は社会性・政治性を具備することによって、語りの世界、表現力はずっと大きくなるといえよう。こうして、トウェインの反帝国主義の修辞は彼の晩年の思想を表現し、それを担いうるものになっていくと思われる。

一見したところ＜くつろいだ＞トウェインの語りについて、ジョン・カーロス・ロウは、じつはそこにはトウェイン自身の深遠な狙いがあり、それによって根深い社会的偏見を心理的変革によって効果的に変革することを目指していると指摘する。なぜならトウェインは、根深い社会的偏見を理屈からだけでは変えられないとの信念をもっていたからだという。こうしたロウの指摘は、本研究でえられた上記結論を、角度を変えて補完してくれるものだと言えよう。

②それでは、そうした変容はなぜおこるのか。その変容を生み出すトウェインの思想的基盤を検討すれば、晩年の彼の社会的・政治的洞察力にいたりつく。『不思議な少年三手稿』中の「少年サタンの物語」で「笑いの武器」を提唱するトウェインは、その担い手に大勢の一般庶民を構想しており、私の見るところ、どうやら彼は多数の一般庶民の認識の

成長に期待する節があり、そこに歴史を動かす「ひとすじの希望」を抱くようである。

こうした活発な晩年のトウェインの表現活動、ならびにそれを支える彼の思想は、既存の晩年像に修正を迫るものだといえよう

（４）最後に、旅行記が内包する理論上の問題に触れておきたい。旅を記録する行為そのものに内在する政治的行為としての意味を考えれば、旅をして「記録する者」/「記録される者」のあいだに横たわる越えがたい溝は、「観察する者」/「観察される者」のあいだの関係性や、「支配する者」/「支配される者」のあいだの力関係が、帝国主義、植民地主義と避けがたく結び着くことによって生じてくる。こうした政治的行為としての意味を少しでも認識すれば、旅行記は論理的に失敗する運命にある。本旅行記に反帝国主義の言説を書きこむことになったのも、また本旅行記がトウェインの最後の旅行記になったのも、トウェイン自身が、旅行記に内在する内的矛盾を認識するに至ったからだろうと考えられる。本旅行記以降、彼は、旅行をしても旅行記を書かなかった。ジョン・カーロス・ロウや、ジェフリー・メイヤーズが、旅行記としては、本書は失敗していると指摘するのも上記の理由からだろう。旅行記としてのジャンルを逸脱してまでも、アメリカの領土的閉鎖空間を全地球的次元へと開いて見せながら、トウェインは彼の議論を展開したといえるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 井川眞砂、マーク・トウェイン・ペイパーズ＆プロジェクト再訪、マーク・トウェイン研究と批評、査読有、9 号、2010、4-8
② 井川眞砂、エルマイラ 2009 年「世の中の滑稽な事柄を笑い飛ばせる日が来るだろうか」、マーク・トウェイン研究と批評、査読有、9 号、2010、43-43
③ IGAWA Masago, Mark Twain's Young Satan Asks a Question: Will a Day Come When People Have Developed Their Humor-Perception? *Journal of the Graduate School of International Cultural Studies,* 19 (2011): 1-10.

〔学会発表〕（計３件）

① 井川眞砂、晩年のマーク・トウェイン――*Following the Equator* (1897) にみる反帝国主義の修辞学、日本英文学会第 85 回大会（招待講演）、2013 年 5 月 25 日、東北大学川内キャンパス
② Masago Igawa, Mark Twain and "the knights of the tiller": The Influence of the American Labor Movement of the 1880's, Elmira 2013: The Seventh International Conference on the State of Mark Twain Studies, August 1, 2013, Elmira College, New York (USA)
③ Masago Igawa, Mark Twain and The Knights of Labor, The Western Literature Association, An Annual Meeting of 2013 (Invited Guest Speaker), October 10, 2013, University of California, Berkeley (USA)

〔図書〕（計４件）

① 亀井俊介監修、井川眞砂、朝日由紀子、有馬容子、石原剛、後藤和彦、里内克巳、武田貴子、中垣恒太郎、他 8 名、彩流社、マーク・トウェイン文学/文化事典、2010、22-42 、 57-61 、 171-172 、 381-418 、419-437
② アメ労編集委員会（井川眞砂、福士久夫、三石庸子、村山淳彦）、他６名、南雲堂フェニックス（平成 22 年度日本学術振興会科学研究費学術図書出版助成）、文学・労働・アメリカ、2010、3-12、159-94
③ スティーヴン・マタソン著、村山淳彦、福士久夫監訳、井川眞砂他 18 名訳、松柏社、アメリカ文学必須用語辞典、2010、231-42
④ 新英米文学会編、井川眞砂、他 24 名、開文社出版、英米文学を読み継ぐ――歴史・階級・ジェンダー・エスニシティの視点から、2012、220-248

〔その他〕
ホームページ等

① 井川眞砂、最終講義「私のマーク・トウェイン研究――＜不思議な少年＞考」、2012 年 2 月 9 日、東北大学 http://hdl.handle.net/10097/53668

６．研究組織
(1)研究代表者
井川　眞砂（IGAWA　MASAGO）
東北大学・大学院国際文化研究科・名誉教授
研究者番号：30104730
(2)研究協力者
Robert H. Hirst
General Editor, Mark Twain Papers and Project, Bancroft Library, University of California, Berkeley.
Victor Fischer
Associate Editor, Mark Twain Papers and Project, Bancroft Library, University of California, Berkeley.